

〈信貴山縁起絵巻〉の様式的研究

——空間表現及び時間表現に関する考察を中心に——

吉田卓爾(京都市立芸術大学、日本学術振興会特別研究員)

〈信貴山縁起絵巻〉の研究において、制作年代等を示唆する資料が殆どないため、様式分析が極めて重要と言える。しかしながら本絵巻の様式分析を本格的に実施したのは秋山光和氏のみであり、本絵巻の様式的問題については未だ十分に解決されていない。本発表では、本絵巻の位置づけ、特に制作年代について改めて様式的な観点から検討する。

〈信貴山縁起絵巻〉について、現在その模写事業に携わられている六法美術の富沢千砂子氏は、現在繋ぎ合わされている詞書と絵の料紙の巻き皺が連続せず、離れて配置されている詞書料紙の巻き皺が部分的に連続すること等から、当初は詞書と絵とが別巻であった可能性が高いと指摘されている。詞書と絵とを別巻とする形式は、『三宝絵詞』の記載や『源氏物語』の記述から判断して、白河・鳥羽院政期以前には広く普及していたと見做し得る。本発表では、様式分析に基づき、この問題についても考察を加える。

〈信貴山縁起絵巻〉においては、観者が各場面の中心人物と一体化したかのように、遠近関係について周囲の景色を描き分けた画面構成が度々見出される。例えば、本来近景が来るべき画面下方に遠景として描写した樹木を描く表現が認められる。通常なら観者が近景として認識する画面下方に遠景の樹木を配するのは非合理とも言えるが、画面の中心人物から見れば、画面下方の樹木も上方の樹木と同様に、遠景として把握されるからである。かかる画面構成は、観者が各場面の中心人物に同化しながら描写対象を観照することを前提としたものである。その一方で本絵巻には、俯瞰構図で場面全体を描く場合もある。その際、比較的接近して出来事を描写する場合もあれば、第三巻の東大寺大仏殿の場面の如く、建築の巨大さを描出するため対象と距離を取っている場合もある。本絵巻では、場面毎に最も効果的な構成が採用され、画面空間の処理が多様で一貫していない。

さらに本絵巻では、各場面間に配された霞の長短の変化が、場面展開において中心人物に係わる時間経過と関係付けられている。つまり中心人物が経験する時間経過も、観者に体感させるように画面が構成されている。一方、比較的文献資料等に恵まれ、その点で院政期の基準作例と言える〈伴大納言絵巻〉では、かかる特色は全く見出されない。すなわち〈伴大納言絵巻〉の画面空間は、観者が俯瞰構図によって描かれた対象を客観的に観照することを前提とし、ほぼ一貫している。また各場面間に配された霞は画一的であり、霞の長短と各場面間の時間経過とは無関係である。発表では他の作品も比較対象に加え、上記以外の点についても言及する。

上に述べた〈信貴山縁起絵巻〉の特色ある画面構成は、必ずしも詞書の内容を前提とせず、絵のみで説話内容を観者に理解させようとする制作態度と密接に関連するものと言える。その点で〈源氏物語絵巻〉とは対極的な性格を有し、絵を詞書と切り離して制作し観照する形が最も効果的であると発表者は考える。時代が進むに連れ絵巻物において、ある面写実的な統一された画面構成が確立されて行くことを顧慮すると、〈信貴山縁起絵巻〉の画面構成は〈伴大納言絵巻〉を始めとする後白河院政期における作品群の画面構成よりも古いと看做し得る。本絵巻は、白河・鳥羽院政期に遡る作例とするのが妥当と考えられる。